

女性の研究活動における中日の違い

Difference in Women Research Activities between China and Japan

馬 光輝 Guanghui MA

緒言

私は日本で17年半勉強と研究を経た後、2001年に中国へ帰国して8年半の研究をさらに続けてきた。現在は中国科学院過程工程研究所の副所長を務める一方、40人の研究グループのリーダーである。グループに助教と准教授全部12人が含まれ、中に女性は7人を占めている。したがって、女性研究活動における中日の違いは多少語れると思う。

女性博士課程の人数の違い

日本と違って、博士課程への進学希望の中国女性は多い。私の生物工学専門では女性は時々半数を超える。これは小さいときから受けた教育の違いによると思う。中国は60年前までは半封建社会で女性の地位が低かったが、1949年以後女性の地位が急激に高くなり、都市ではほぼ100%の家庭が共働きである。このような雰囲気の中で育った女の子は専業主婦になる考えは全くないのである。

採用時の事情

中国の研究機関・大学は毎年、学生就職活動の際に求人状況を全国に向けて広報する。沢山の応募から候補者を選んで面接に進む。博士学位の女性が多いので、そのため研究職の希望者も多い。面接のときにはきはきとした女性が多く、確かに“女性を採用したら、後々産休などで仕事に影響を与える”と女性の私も考えるが、元気のない男性よりもきはきとした女性を最終的に採用したことはしばしばある。

働く雰囲気の違い

私は日本で助教のときに出産を経験し、産前はほとんど休まず、短縮労働の政策も利用しなかった。それは、利用すれば教授にその分だけ多く負担をかけると考えたからである。また、男性の同僚は育児に使う時間が少なく、遅くまで仕事をしている。私は短縮労働を利用せず、子供を寝かせた後も眠気を我慢して論文を書いたりするにもかかわらず、男性よりも研究に使う時間が少ないので、業績が少なくなると何時も不安を感じていた。

中国では、このような不安は日本より遥かに弱く、女性は長い産休を利用することは当たり前の雰囲気である。その原因はやはり女性研究者が多いので、皆がそうすれば不安もないだろう。また、中国の男性は育児にもかなり時間を使うので、仕事にける時間は女性より少し長いくらいで、女性は追い付いていけない不安はそれほど強く感じない。

したがって、女性の不安を解放するには、政策はもちろん、職場での平等だけでなく、家庭での育児も平等に分担する習慣を社会全体に広げていく必要がある。

昇進状況の違い

中国の研究機関での昇進は男女の機会は比較的均等だと思ふ。私が所属している研究所は、少なくとも2年に1回の昇進競争会が開かれる。教授と准教授席数を公開した上、すべての希望者は評定委員会の前に研究発表を行う。最後に無記名投票で教授と准教授を決める。評定委員会の構成には学外の専門家も入り、なるべく学内派閥の影響を弱くする。私のグループでは最近3年間に3人の女性が准教授になった。

私の努力、および若手女性研究者に伝えたい言葉

機会均等にもかかわらず、女性の昇進は徐々に遅れることは事実である。私の研究所では女性准教授の人数は男性との差は小さいが、女性教授の数は男性の1/10足らずである。それはやはり女性が子供をもつと、年齢が上がるにつれて仕事と家事の両立に疲れてきて、仕事への一生懸命さが段々衰えてくるからである。

したがって、私は努めて若手女性研究者に常に頑張るようにと声をかけている。たとえば、女性助教は昼間は学生の指導や雑用をして、夜は子供の世話に疲れて論文を書く精力がなくなる状況に対して、私は常に“疲れに負けたいいけない”、“子供を寝かせた後も頑張って起きて論文を書いてください”などを言っている。彼女達は私が彼らの昇進を心配していると最終的にわかって、頑張るようになる。さらに、私は積極的にプロジェクトを彼女達に担当させている。プロジェクトを完成しなければならないというプレッシャーがあると、怠けられなくなる。いったん、このような習慣を身につけると、あとは伸び伸びと成長していける。

すべての若手女性研究者にも、“是非、体の疲れに負けずに、時間を上手に使って、生き生きとした研究活動を送ろう”と伝えたい。



現在の研究グループ中の7人の女性研究者



馬 光輝 Guanghui MA

中国科学院過程工程研究所 教授
中国上海出身。群馬大学繊維高分子工学学士号、東京工業大学高分子工学の修士、博士号を取得。1994年より東京農工大学助手、2001年より現職、バイオテクノロジー用の高分子微粒子材料の作製に従事。

E-mail: ghma@home.ipe.ac.cn